

令和5・6年度 静岡県教育委員会指定研究

研究主題

誰一人取り残さない授業づくり
～対話的な学び・協働的な学びを通した Well Being～

発表要項



令和6年11月13日(水)

下田市立下田中学校



目 次

はじめに	1
1 研究テーマについて	2
2 研究イメージ図	3
3 研究の取組	
(1) 生徒と共につくる授業	4
(2) 人生や社会を豊かにするキャリア教育の推進	5
(3) 校内研修の充実と効率化	5
(4) 授業と授業をつなぐ家庭学習	6
4 成果と課題	7
おわりに・研究に携わった教職員	10

はじめに

「ふじのくに『有徳の人』づくり大綱 ～誰一人取り残さない教育の実現に向けて～(2022年3月)」の中で、本県の教育理念や施策の基本方針が示されています。その理念は、「この地に暮らす誰もが人生の夢を実現し、幸せの基盤となる『誰一人取り残さない教育の実現』に全县を挙げて取り組んでいくことが重要」とされています。

このような背景の中、本校は、県指定の「『誰一人取り残さない』教育の実現に向けた授業づくり、学級づくり調査研究事業」を受け、令和5年度からの2年間の研究に取り組んできました。

研究は、本校が志向する「対話や協働を大切にした、生徒と共につくる教育活動」を念頭に置きながら、研究の目指す方向性を模索するところから始まりました。学校教育の中核に位置付くのは授業です。授業を通して生徒一人一人が現在、そして未来を見通してどのような力を身に付けていかなければならないのか、そのための授業づくりはどうあるべきかについて全職員が一丸となって、知恵を出し合いながら試行錯誤を重ねてきました。

現段階の到達点として、研究テーマ「誰一人取り残さない授業づくり ～対話的な学び・協働的な学びを通した Well Being～」を設定し、「目標やねらいを達成する課題設定の在り方」や「コミュニティ・スクールを活用した人生や社会を豊かにするキャリア教育の推進」、「ICTの効果的な活用等による問いや考えを再構成するための手立ての工夫」の3つを柱としながら研究を推進しているところです。同時に「校内研修の充実と効率化」、そして「授業と授業をつなぐ家庭学習の在り方」についても「誰一人取り残さない授業づくり」のための方策として位置付けています。

生徒たちを取り巻く環境は大きく、急激に変化しており、予測困難な時代を迎えています。これから生きる生徒たちには、現在、そして未来をよりよく生きるべく、自ら考え、判断し、行動する力を備える必要があると考えます。本研究発表会を一つの通過点として、誰一人取り残さない授業について再考し、学習指導要領の趣旨を踏まえた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な推進、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた更なる授業改善につなげていく所存です。

最後になりましたが、本校の研究推進にあたり、静岡県教育委員会義務教育課、静岡教育事務所地域支援課、下田市教育員会学校教育課、他多数の皆様に多くのご示唆、ご指導をいただいたことに対しまして心より感謝申し上げます。

令和6年11月13日

下田市立下田中学校長 山梨 弘樹

1 研究テーマについて

(1) 研究テーマ

誰一人取り残さない授業づくり
～対話的な学び・協働的な学びを通したWell Being～

(2) 研究テーマについて

本校では、「共につくる」をキーワードとして授業を中心とする教育活動を行っている。

「誰一人取り残さない授業づくり」について教師だけが考えるのではなく、全校集会で生徒に「誰一人取り残さない授業とはどういうものか」という問いを投げかけ、各学級で話し合う場を設定した。また、令和5年度に設置されたコミュニティ・スクールを活用し、地域の方々も生徒たちのよりよい学びの実現に向けて参画している。

変化が激しく、予測困難な世の中で、生徒一人一人が主体的に自分の人生と向き合い、対話を手段として多様な他者と協働し、自分の幸せを実現したり、社会をよりよいものにしていこうとする姿勢が育ったりしていくような学校を、生徒や教職員、保護者、地域の方々と共につくっていきたいと考えている。

「誰一人取り残さない授業づくり」を探究することが、誰一人取り残さない学級づくり、学校づくりにつながると考え、研究テーマを設定した。

(3) 研究テーマ実現に向けた手立て

ア 生徒と共につくる授業

- (ア) 目標やねらいを達成するための学習課題の設定
- (イ) 人生や社会を豊かにするキャリア教育の推進（コミュニティ・スクールの活用）
- (ウ) 問いや考えを再構成するための手立ての工夫（ICTの効果的活用等）

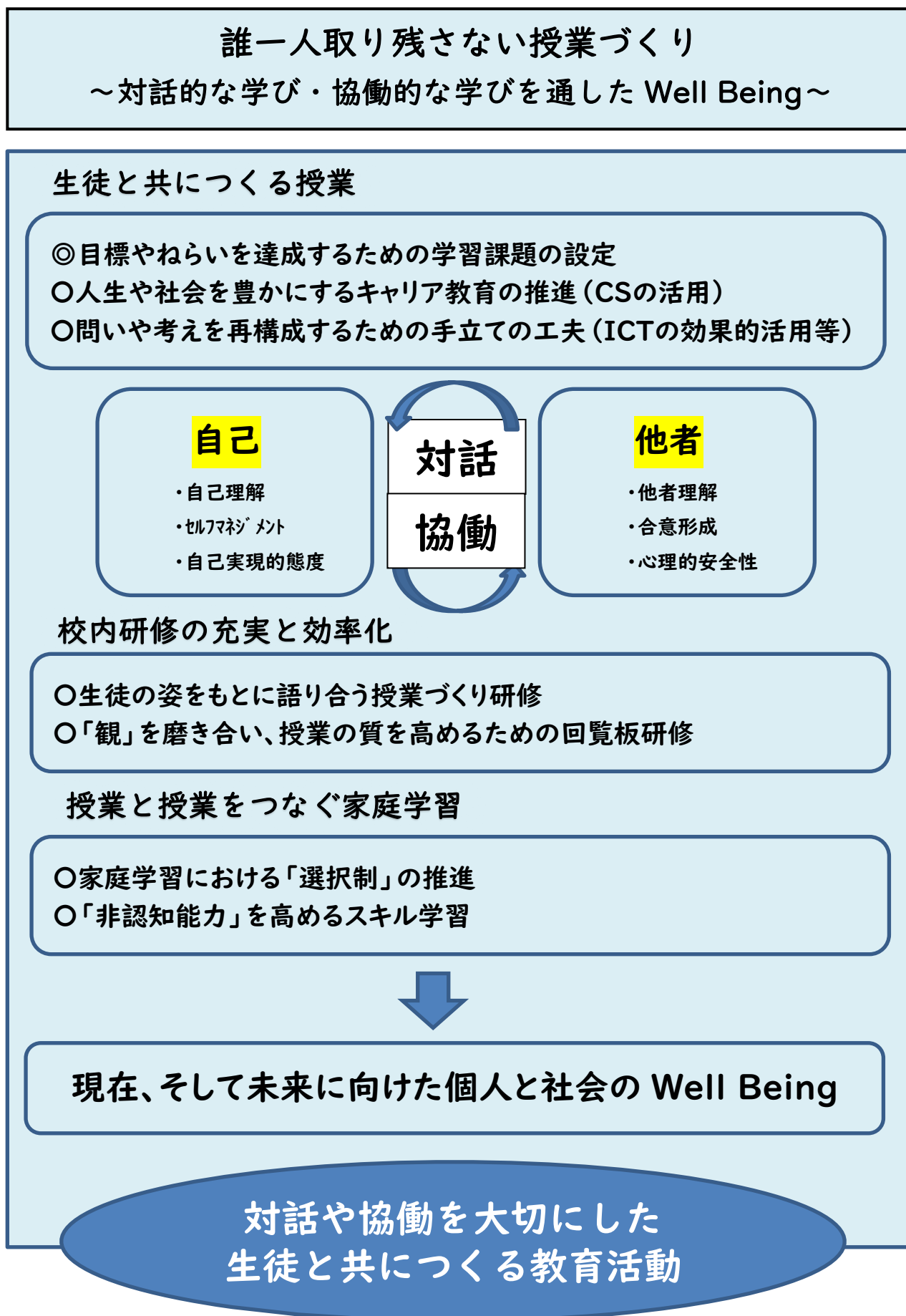
イ 校内研修の充実と効率化

- (ア) 生徒の姿をもとに語り合う授業づくり研修
- (イ) 「観」を磨き合い、授業の質を高めるための回覧板研修

ウ 授業と授業をつなぐ家庭学習

- (ア) 家庭学習における「選択制」の推進
- (イ) 「非認知能力」を高めるスキル学習

研究テーマ



3 研究の取組

(1) 生徒と共につくる授業

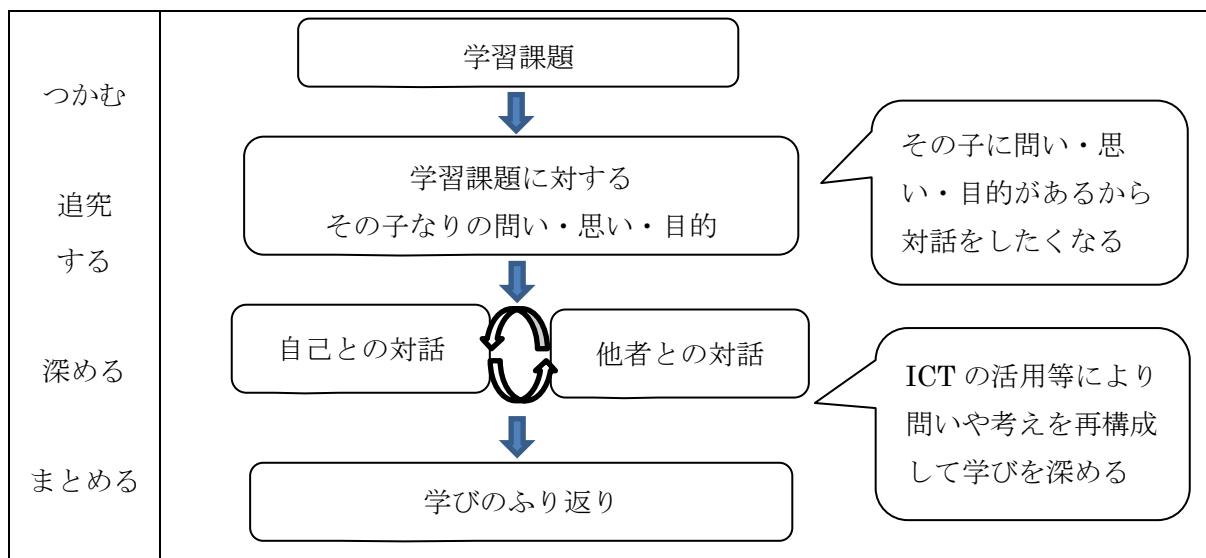
本校の研究は、「誰一人取り残さない授業とはどのようなものか」ということについて、生徒と共に考えるところから始めた。この問いを全校集会で生徒に投げかけ、各学級で話し合いをしたところ、生徒からは「みんなが参加している授業」「みんながわかった・できたと思える授業」「『わからない』が言える授業（学級）」などの意見が出た。また、教職員からは「どの生徒も安心して学びに参加できる授業」「その子なりの学びがある授業」「お互いのよさや違いを認め合える授業」などの意見が出た。このような授業をつくる第一歩として、生徒が「なぜ」「どうして」という問いをもったり、「やってみたい」「できるようになりたい」という思いを抱いたりして、主体的に学びに向かうことが大切だと考える。そこで、本校では「目標やねらいを達成するための学習課題の設定」を重点として、以下のポイントを意識して授業づくりをしている。

- ・ 本時や単元の目標やねらいを達成することにつながる学習課題を設定する。
- ・ 課題設定の際、生徒の「問い」や「思い」を引き出す。
- ・ 学習課題を視覚化する。



生徒一人一人が問いや目的をもって主体的に学びに向かうことで、対話をしたり、ICT を効果的に活用したりしながら問いや考えを再構成し、学びを深めることができる。そして、そうした授業の積み重ねにより目指す資質・能力が育まれ、現在、そして未来の個人と社会の Well Being の実現につながっていくと考える。

<下田中学校授業づくりのイメージ図>



(2) 人生や社会を豊かにするキャリア教育の推進～地域と共につくる学び～

「下田で学ぶ」「下田から学ぶ」「下田を知る」「下田を愛する」をキーワードに、総合的な学習の時間では、下田市内外の「人」「もの」「こと」を資源として、自分やまちの未来について考える学習を3年計画で進めている。

令和5年度に設置されたコミュニティ・スクールを活用し、職業体験や職業講話などにおいて、地域の方々も生徒のよりよい学びの実現に向けて参画している。地域の方と総合的な学習の時間の年間計画や実施計画をつくるなど、年間を通して授業づくりを行っていることも本校の特色の一つである。また、地域の方々だけでなく、生徒が自身のキャリア形成を幅広い視点で考えることができるよう、オンラインで市外に住む様々な業種の方から話を伺う場も設定している。

「どのような大人になりたいか」「どのような人生を歩んでいきたいか」というビジョンをもつことができれば、一人一人の日々の生活はより豊かなものになるだろう。その一助となるにはどのような取組をすればよいか、地域の方々と共に考えながらキャリア教育を推進している。



(3) 校内研修の充実と効率化

「誰一人取り残さない授業」の実現を目指す上で、教職員の「観」の転換が重要になる。授業をはじめとした自らの日々の教育実践をよりよいものにしていくために、本校では「生徒の姿をもとに語り合う授業づくり研修」やお互いの『観』を磨き合う回覧板研修などに取り組んでいる。

ア 生徒の姿をもとに語り合う授業づくり研修

本校の研修では、「生徒の姿から学ぶ」ことを大切にしている。教師が「何を言ったか」「何をしたか」以上に、「生徒がどう変容したか」が大切だと考えるからである。

同じ場面を見ていても、教師によって「見方・捉え方」は異なる。多面的・多角的に生徒理解をするためにも、公開授業後の研究協議で着目生徒の表れについて話し合い、生徒の姿をもとに授業づくりについて学んでいる。



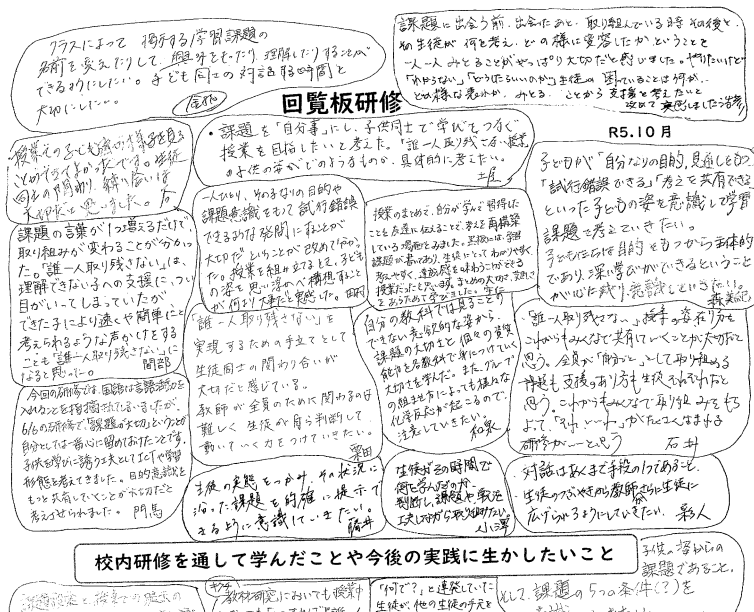
この他に、令和6年度は各学級で気になる生徒をピックアップし、「エピソード記録」という形で気になる生徒の些細な表れを記録する取組も行った。その記録をもとに学年部職員で話し合い、様々な角度から生徒を見たり、変容を捉えたりすることで、生徒への理解を深めた。

イ 「観」を磨き合う回覧板研修

回覧板研修とは、テーマを中央に書き、次に示す写真のように自分の意見を書いて回覧するものである。令和4年度から学期に一回実施し、お互いの意見や考えを見合うことで「観」を磨き

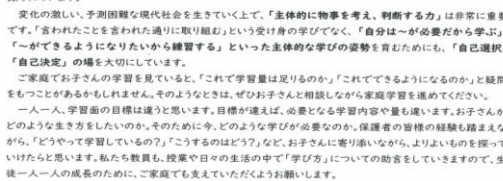
- ・「よい授業」とは？
- ・「学び」とは？
- ・「誰一人取り残さない授業・学級」とは？
- ・「10月の校内研修で学んだことや今後の実践に生かしたいこと」
- ・「よい学習課題」とは？そのために日々の授業で意識していることは？

回覧板研修



ア 「選択制」の推進

令和6年度には、本校の方針や取組を、右の写真のように学習部通信という形で保護者に発信した。家庭学習を「学校任せにする」「各家庭に任せる」という考えではなく、「生徒と保護者、教師で共につくる」とい



イ 「非認知能力」を高めるスキル学習

令和6年度には、非認知能力を測定できるサービスを利用して生徒の実態を把握し、個々の支援に活用した。「対人関係スキル」や「自己理解」など、項目別のコラムやワークを活用し、家庭学習の選択肢の一つとして取り入れ、生徒は学んだことや感想をロイロノートで提出した。

生徒の振り返りから、自分の課題と向き合い、自己と対話しながら学んでいる様子が伺えた。まだ試行段階の取組ではあるが、筆記試験のような「見える学力」を高める学習だけでなく、このような非認知能力のスキルを高めるような学習も、生きていく上で大切だと感じている。今後も、個々の支援に活用する有益なツールとして、活用方法を模索していきたい。

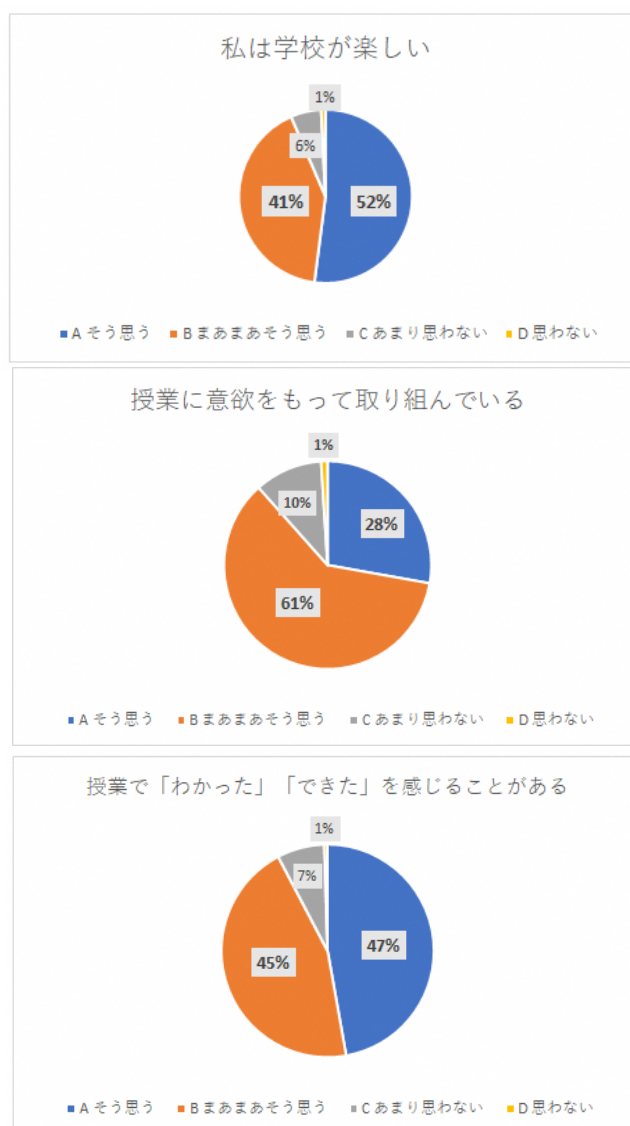
4 成果と課題

(1) 学校評価と非認知能力の測定結果から

「学校が楽しい」と感じている生徒の割合が高いのは本校のよさの一つである。アンケートの数値からも読み取れるが、授業で「わかった」「できた」が実感できたり、友人や教師との関係性もよい生徒が多いから、このような結果が出たのではないかと思う。

また、非認知能力の学校個別レポートを見ると、生徒が所属する学級等のコミュニティへ安心感があり、その中で自分を高めようと前向きに活動できていることが読み取れる。安心感のある学級づくりが進むことで、自然と互いに意見交換ができたり、わからないときに仲間に気軽に質問したりすることができるようになる。そのような学級づくりを行うことが、「その子なりの学び」にもつながっていくと考える。

一方で、「私は授業に意欲をもって取り組んでいる」という項目について、肯定的な回答をした生徒は89%であるが、その中でA（そう思う）と回答した生徒は28%と低い。今後も生徒の問いや思いを学習課題として設定することを意識し、生徒が意欲をもって、主体的に学ぶ授業づくりを目指したい。



学校個別レポートより(5段階評価の平均値)

	コミュニティ への満足度	友人との 関係性	教師との 関係性	クラスの 心理的安全性	自己肯定感	自己実現的 態度
全国平均	3.3	3.9	3.0	3.3	3.4	3.6
下田中	3.5	4.2	3.2	3.5	3.6	3.9

(Edv Path 検査結果より)

(2) エピソード記録より

【他者との関わりが増えたAさん】

2年生のときは「できない」が受け入れられず、自信がなかったAさん。よい点数をとっても、「この後下がってしまったらどうしよう…」と、常に不安を抱いていた。自信が持てず、自分から他者に関わりを求めることもできなかった。

そのような背景の中、3年生の1学期には特定の級友との関わりが主だったが、2学期には授業や日々の生活の中でいろいろな仲間との関わりが増えた。担任が本人と話をすると、周りの仲間からの声掛けもあり、人間関係を広げることができたことがわかった。相手から関わりを求めてきてくれることが嬉しかったようで、そのことから自信が生まれ、「自分からみんなに関わってみよう」という気持ちをもって安心して発言できるようになったことがわかった。



【不登校から復帰したBさん】

Bさんは2年生の途中まで不登校だった。3年生になってからは登校できるようになったが、他者と関わることはできなかった。授業者が「わからないときは人に聞いてもいいよ」と言っても、自分の席を離れて聞きに行ったり、隣の席の友だちに話しかけたりする姿は見られなかった。常に教師の支援を待っており、じっとしていることが多かった。

しかし、2学期に入ってから表情が明るくなり、授業中も自分から友だちのところに关わりを求めるようになった。ある教師が「1学期よりも友だちとの関わりが多くなったけれど、何かきっかけはあったの?」と聞くと、「うーん、Cさんがいたからかな」と笑顔で話していた。



上記の2つのエピソードから、一人一人に学びがある授業をつくる上で、「友人との関係性」は非常に重要だと実感した。そして、このような表れは、教師が一方的に説明をするような授業からは生まれない。対話や追究が生まれるよう、生徒の問いや思いをもとにした学習課題を設定したり、意図的に他者と関わる場を設定したりしていることも、AさんやBさんの変容の一助となっていると言えるだろう。

(3) 生徒に寄り添い、支える教職員の姿



生徒に寄り添い、視線を合わせて支援する教職員の姿を、授業の中で多く見かける。自分から関わりを求めることを苦手としている生徒にとって、わからないときや困ったときに支えてくれる教職員の存在はとても心強い。授業以外にも、休み時間等を利用して定期的に二者面談を実施している。一人一人の生徒と向き合い、その生徒の悩みを共有したり、成長を励ましたりすることを通して、長い時間をかけて人間関係を構築してきたことも、安心して学んだり、級友とのつながりを広げたりすることにつながっている。

また、本校生徒は学校行事や委員会活動等、様々な場面においても「自分たちの手で学校をつくらう」という思いをもって、様々なことに挑戦している。その際、「失敗してもいい」「そこから学んで成長すればいい」という教職員の思いを生徒も共有し、共に歩んでいる。

「誰一人取り残さない授業づくり」を探究する中で、授業以外の場面においてもよい表れを多く見ることができるようになった。「誰一人取り残さない授業づくり」の探究は、「誰一人取り残さない学級づくり」に、さらには「学年づくり」「学校づくり」に向かっていると感じている。

(4) 今後の展望

自分の人生を自分事として捉えて行動する力や対話を手立てとして他者と協働する力を、教育活動全体を通して育むことができれば、個人の、そして社会の Well Being につながると考えている。

「共につくる」をキーワードとし、「生徒の問いや思いを学習課題として設定すること」や「人生や社会を豊かにするキャリア教育の推進」等、今年度まで本校の研究で取り組んできたことは、生徒の主体性や当事者意識、他者と協働する力を育む上で非常に有効であると考えます。

今後は、家庭学習の取組について検証し、生徒や保護者と共に考えたり、もう一度自分たちの取組や支援の方法、言葉掛け等、それら一つ一つが学校教育目標の達成に向かっているのかを振り返ったりしながら、今の取組をよりよいものにしていきたい。また、同時に教職員自身も生徒の姿から学び続け、「誰一人取り残さない授業づくり」に向けて自分たちの「観」を磨いていきたい。

おわりに

研究主題を「誰一人取り残さない授業づくり～対話的な学び・協働的な学びを通した Well Being～」として、日々の実践はもちろん、公開授業や校内研修に取り組んでまいりました。授業においては学習課題の設定を重点に生徒と共につくる授業を目指しました。総合的な学習の時間は、キャリア教育を根幹に据え、学校運営協議会の委員をはじめ、地域の方々の参画を得て共に考えながら推進しています。生徒の姿をもとに語り合う授業づくり研修や回覧板研修は、互いに意見を出し合ったり、考えを見合ったりすることで観を磨き合う機会となっています。

エピソード記録にもあるように、他者との関わりが増えたAさんや不登校から復帰したBさんの変容は、「誰一人取り残さない授業づくり」に向け、生徒と共につくりあげてきた研究の成果であると感じています。しかしながら、まだまだ課題は山積しています。例えば、主体的な学びとなる家庭学習のあり方については、生徒、保護者と共につくっていきけるよう今後も努めてまいります。また、生徒一人一人をよりきめ細やかに理解する観点から取り入れた非認知能力の育成についても、個々の支援に活用する有益なツールとして研究を推進していきたいと思ひます。

私たちは、本研究発表会を一つの通過点として、更なる授業改善に取り組んでいく所存です。ぜひ、本研究発表会において、本校教職員のつくり上げた授業と生徒の姿をご覧いただき、皆様方から忌憚のないご意見をいただければ幸いに存じます。

結びに、これまでご指導、ご助言をいただきました多くの皆様に深く感謝を申し上げます。

教頭 山本 英希

【研究に携わった教職員】

○令和6年度

校長	山梨 弘樹	教頭	山本 英希	教諭	須田 元規	教諭	佐藤 真実
教諭	山本 圭子	教諭	森 美紀	教諭	野崎 久孝	教諭	土屋 高洋
教諭	菊池 智	教諭	土屋 賢	教諭	石井 暁彦	教諭	佐々木浩彦
教諭	和泉 雄介	教諭	藤井 淳	教諭	大隅 裕太	教諭	栗田 史章
教諭	間部奈都子	教諭	入江 健太	教諭	堤 淑乃	教諭	小澤 真澄
教諭	土屋 純人	教諭	渡井 哲広	教諭	田村明日美	教諭	若林 美歩
教諭	鈴木 勇真	教諭	門馬 綾子	教諭	小川 健介	養護教諭	谷 尚子
統括室長	土屋 健	事務主査	藤池あゆみ	講師	土屋 恒夫	S C	田巻 夏絵
SSW	中村 仁美	SSS	田中ゆみ子	ALT	安藤マリー	ALT	濱崎マリベル
支援員	寺川 由佳	支援員	鈴木枝良香	支援員	長田 知子	支援員	松本 博子
支援員	保坂 優夏	市事務	高橋由香利	用務員	柳沼 亜紀	用務員	井上 正光
司書	森田 朗子	適性指導	野崎 美香	適性指導	原 奈穂美	ICT	吉田 裕哉

○令和5年度

教頭	宇仁 猛	教諭	渡邊 治	教諭	正木 正喜	教諭	真野 菜美
教諭	森 彩人	教諭	金指 彬音	事務主任	須田 京子	講師	土屋 治巳
支援員	山本 公代	支援員	菊池 真美	適性指導	鈴木 敏子		

